様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　５月　３１日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2007～2008
課題番号：１９５２０２７６
研究課題名（和文）　ベルリン・ダダイズムの文学作品における文学的技法の研究

研究課題名（英文）　A study on literary techniques in the works of the Dadaism in Berlin

研究代表者
宇佐美　幸彦（USAMI YUKIHIKO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：００００６７７３７

研究成果の概要：ベルリン・ダダイズムの中心的な芸術家のグロッスとメーリングの共同作業に注目し、作品の分析を行った。一方の極に、伝統を破壊する新しい技法、すなわち同時進行の原理や、独特のコラージュ技法を駆使している作品があるのに対して、他方の極には、伝統的な技法を継承し、大衆的な歌謡や一枚絵に近い方向があることが確認できた。ダダイズムの芸術家が否定したのは、旧来の芸術評価における固定的なカノン（規範）である。これに対して彼らは、民衆的・通俗的な芸術の意外性・革新性を取り入れて、芸術の在り方を転換しようとしたのである。ダダイズムの生産的な面を明らかにした点が研究の大きな成果である。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００７年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２００８年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総　計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学
キーワード：独文学、芸術諸学、文学一般

１．研究開始当初の背景

ダダイズムは1920年前後のヨーロッパの前衛芸術の中でもとりわけ急進的な芸術改革をめざした文学・芸術運動である。ベルリンはこの運動の重要な中心地であり、ベルリンのダダイストたちは過激な主張と芸術実践により、当時の芸術（文学）世界に衝撃を与えた。しかしダダイズムの芸術は、ドイツにおいては1930年代にはナチスの文化政策により、「退廃文化」として排斥され、第二次世界大戦後においても、長い間、注目されず、ほとんど研究もされないままであった。

1970年ごろから、カール・リーハ、ラインハルト・デールらの研究により、ダダイズム芸術の歴史的評価が再検討されるようになり、当時の雑誌の復刻版も刊行され、またヒュルゼンベック、グロッス、メーリングなど主要なベルリン・ダダイストたちの著作集も新たに刊行されようになった。ようやく1990年代以降、豊富な研究資料の刊行が出揃い、現在は包括的な研究の条件が

整うようになった。
　ヨーロッパのダダイズム（文学分野）に関して、日本では、高安国世他訳の『ドイツ表現主義』5巻（河出書房新社、1971年）のなかに一連のダダイストの作品、針生一郎氏訳、ハンス・リヒター著『ダダ－芸術と班芸術』（美術出版社、1981年）、平井正『ダダ・ナチ。ドイツ・悲劇の誕生』3巻（せりか書房、1993年）など、ベルリン・ダダイズムの作品も翻訳出版されているが、作品の翻訳やダダイストの回想など紹介的な書物が中心で、芸術的な技法についての詳しい研究はまだほとんどなされていない。またダダイズムの特有な表現法のため、翻訳はかなり困難で、上記の翻訳出版では不十分な点も多い状態であった。このためまず言語的な面での作品の再検討と、作品解釈をするための時代背景や前衛芸術理論についてのより深い解明が必要であった。
　本研究の研究代表者である宇佐美幸彦は、ドイツのダダイズム研究の第一人者であるカール・リーハ氏と長期にわたる研究交流を続けてきた。リーハ氏はジーゲン大学名誉教授で、レクラム文庫の『ベルリン・ダダ』、『ダダ・トタール』をはじめ、ダダイズムについての著書や論文を多数出版している。リーハ教授は1984年に、関西大学の招聘教授として来日し、関西大学、阪神ドイツ文学会、大阪ドイツ文化センターなどで講演を行った。研究代表者はこのときいくつかの講演で通訳を務め、その後、密接な研究上の交流を行うようになった。1985－86年には、研究代表者はフンボルト財団の奨学生として、ジーゲン大学に長期の研究滞在をし、同教授から多くの研究上の指導を受けた。
　研究代表者は、この20年ほどの間、ダダイズムに関する研究を主要なテーマとしてきた。すでに1986年に、ドイツの重要な文学研究の学術雑誌“Sprache im technischen Zeitalter”に”Kyojiro Hagiwara－Ein japanischer dadaistischer Dichter in den 20er Jahren”（No.99, 1986 September, p.184-197,全文独文）という論文を発表し、1988年には著書『ジョージ・グロッス』（297ページ、関西大学出版部）を刊行した。1995年には日本独文学会『ドイツ文学』に書評「平井正（著）『ドイツ悲劇の誕生　ダダ／ナチ』」を執筆、2000年には論文“Zur Geschichte des japanischen Dadaismus in den 20er Jahren”（関西大学『独逸文学』第44号、p.129-146）（全文独文）を発表、2004年には翻訳著書『ダダの詩』（カール・リーハ編、関西大学出版部）を刊行した。
　こうした実績を踏まえて、今研究ではベルリンの代表的ダダイストとして活動したジョージ・グロッスとヴァルター・メーリングの文学作品の技法に注目し、ダダイズムの芸術改革がどのような内容であったかを検証し、文学史・芸術史にダダイズムの位置づけに寄与したいと考えた。

２．研究の目的
　研究の目的としては、次の３点を設定した。
　（１）ダダイズムの芸術を近代的大都市の成立との関連で捉え、芸術の文学的技法と社会的背景がいかに結合しているかを、具体的な事例で明らかにすること。
　19世紀後半から20世紀初頭にかけて、50年ほどの間にベルリンは人口が約4倍に増加するなど急速に大都市化が進んだ。また地下鉄が開通するなど現代的技術社会が急速なテンポで発展した。この時代的な背景の中で、商業的広告、交通標語など多くの新しい表現が出現した。ダダイズムの芸術は、それ以前の芸術至上主義的な芸術表現に対抗し、意図的にこれらの日常的表現を断片化、パロディー化しながら芸術のなかへ取り入れ、実験的な芸術表現を模索した。本研究はグロッスとメーリングの文学作品の中でこれらがどのように表れているか、実証的に明らかにすることをめざすものである。

　（２）ダダイズムと当時の大衆文化との接点を明らかにすること。
　1920年前後にベルリンでは、ラグタイムなどアメリカの新しい音楽やダンスが輸入されていた。この音楽やダンスのリズムは、原始的な素朴な芸術とモダンな新しさを結合させようとするダダイズムの芸術家たちに好まれた。本研究は、ラグタイムや当時の流行歌がいかにダダイズムの芸術に取り入れられ、その文学的技法の成立とかかわっているかを具体例で明らかにすることを試みる。

　（３）文学作品と美術作品との技法上の共通点に着目すること。
　ジョージ・グロッスはダダイズムの時代に、文学作品と美術作品を並行して創作した。美術作品におけるコラージュ、モンタージュ、パースペクティブの複線化、色彩や曲線の誇張的表現、対象の抽象化など、立体派、印象派、表現派の絵画などに見られる前衛的な技法が、ダダイズムの美術作品に取り入れられ、同時進行、偶然性、断片化などの原理に従って、新たな実験的芸術が試みられた。この美術の技法はダダイズムの文学作品の中にも見られる。グロッスの美術作品と並行して創作された文学作品には同じテーマの作品が多数（「深夜カフェ

ー」、「サーカス芸人」、「ベルリン」など）あり、メーリングの場合にも「ベルリン同時進行」などの作品でコラージュ的手法を取り入れている。文学と美術という異なったジャンルの技法上の共通点について、本研究は具体例をあげて実証的に明らかにしようとするものである。

３．研究の方法

研究方法は実証的な比較研究である。ジャンルの横断という点でも、通史的な発展という点でも比較研究が行われ、研究対象の特徴の明確化がめざされた。メーリング文学作品とグロッスの美術作品を比較すると、お互いのジャンルを超えて共通した技法を展開していることが判明する。また旧来のベンケルザングも比較研究の対象とした。

研究対象としては、ベルリン・ダダイズムの活動時期に発行されたダダイズムの雑誌に掲載されたグロッスとメーリングの作品を取り上げ、これを詳しく分析した。すなわち『誰もが自分のフットボール』、『破産』、『大まじめ』という雑誌にはほとんど毎号、グロッスとメーリングの作品が掲載されており、しかもこれらの雑誌のほとんどが第一次世界大戦直後の混乱したドイツの首都ベルリンでの社会状況に即した時事的テーマを掲げており、この二人のダダイズム芸術家は共通の芸術的認識により、極めて緊密な関係の共同創作活動を行った。

グロッスも別個に詩作品を発表しているが、これらの雑誌においてはメーリングの詩とグロッスの素描が同一テーマのもとで関連性を持って作成されているケースがほとんどである。本研究では、文学的作品と美術的作品の共通的技法をこれらの雑誌の芸術作品において検証した。

４．研究成果

ベルリン・ダダイズムの雑誌に掲載されたメーリングの詩作品とグロッスの絵画とを検討した結果、次のような点が指摘できる。

（１）ベルリン・ダダイズムの活動時期は短いものであったが、この時期にメーリングとグロッスはほぼ毎号、雑誌に作品を掲載し、極めて生産的な芸術活動を行った。二人は同じダダイズムの仲間(クラブ・ダダ)として活動し、多くの点で両者の芸術活動には共通点が見られる。まず芸術の在り方であるが、二人とも芸術至上主義を排した。芸術が社会の緊急の課題を取り上げ、アクチュアリティを持たねばならないという点で二人の姿勢は一致していた。このことにより、第一次世界大戦後のインフレや社会暴動、大都市ベルリンの犯罪や不安に満ちた混乱した社会状況が意図的に芸術作品に取り入れられことととなった。こうした点で作品のテーマも技法も両者はジャンルの違いを超えて、同一の歩調をとっているということができる。

（２）グロッスとメーリングの両者に共通して指摘できることであるが、文法の破壊、伝統的な遠近法の廃止、同時進行、モンタージュ、コラージュという典型的なダダイズムの新しい技法は、主としてドイツやベルリンの社会全体を芸術作品の対象とするときに用いられていると結論づけられる。これに対して、両者ともに、特定の政治的・社会的メッセージを芸術作品の中で表現しようとする傾向が強い場合は、作品の単純化や伝統的規範化が前面に出てくることが確認できる。『破産』、『大まじめ』などはベルリン・ダダイズムの代表的な雑誌ではあるが、これらに掲載されているメーリングの社会的なテーマの詩作品はパロディー的な部分はあるにしても、伝統的な大衆的リート形式で書かれているものがほとんどで、整然としたリズム、一貫した脚韻などで表現されている。つまりそれらは文法や単語を激しく破壊しゆがめるという典型的なダダイズムの技法をとっていない。グロッスの素描も単純化の傾向を示している。確かに背景の労働者の悲惨な姿と、これを弾圧する軍人たちの破廉恥な姿が同時進行の原理によりモンタージュ的誇張表現で描かれてはいるが、ダダイズムの新しい原理である偶然性による突飛な組み合わせではなく、事態の二つの極を意図的に関連させ、コントラストとして描いている。こうした素描は、典型的なダダイズム作品とは異なった傾向といえよう。上記の雑誌が毎号特定のテーマで特集を組んだことが、メッセージ性が前面に出て、ダダ的な技法が背後に追いやられた主要な原因と考えられる。これに対してメーリングの「ドライメーデアルハウスでの媾合」や「ダダ・プロローグ 1919 年」という作品では、ドイツ全体の混乱した社会を表現的にも反映しており、メーリングは伝統的韻律や脚韻は無視して、コラージュ風に描いている。グロッスも「ドイツ冬物語」や「オスカー・パニツァに捧げる」という油彩作品では、画面いっぱいに複合的なモティーフを描き、単純な結合ではなく、多くの異質な要素を同時並行的に並列させて描いている。こうした作品においては典型的なダダイズムの技法が確認できる。

（３）大衆的な芸術とダダイズムの芸術革新に関連性についても具体例によって明らかにすることができた。上記のように、メーリングとグロッスの作品では、伝統を破壊する新しい技法、すなわち同時進行の原理や、独特のコラージュ技法を駆使する傾向と、伝

統的な技法を継承し、大衆的な歌謡や一枚絵・ベンケルザングに近い傾向という二つの相対立する方向があることが確認できた。ダダイズムは否定の芸術であると一般に主張されることが多いが、ダダイズムが否定したのは、それまでの支配芸術の規範である。むしろダダイズムは多くの実験的な表現や、民衆芸術の活性化により、芸術活動に積極的生産的に関わったのである。大衆的な大道芸や民衆の間の俗っぽい歌謡から多くの要素を取り入れ、新しい技法の中に取り入れているという点に注目すべきであろう。

（４）グロッスとメーリングは 1920 年ごろまでは緊密な関係の中で共同作業を行っていたが、その後、両者の世界観が微妙に変化し、それぞれ別個の方向を歩むことになった。しかし極めて強固な共同活動の時期であったベルリン・ダダ時代の上記の雑誌の作品においても、詳しく観察すると両者の間にすでに萌芽的な立場の違いが確認できる。メッセージ性の強い作品においてグロッスは階級的な立場から労働者の姿を権力者と対置させているが、これに対してメーリングの場合は組織的な労働者はほとんどと登場しない。アウトロー的な犯罪者の立場に同情することはあっても、組織的な労働者の運動とは一線を画し、アナーキーな個人主義の立場を示しているのがメーリングである。この点は技法の上でも微妙な違いを持つ。労働者の大衆的な路線は、労働歌や教育劇などの伝統と結びついて、より大きな民衆芸術とのつながりを持つ可能性があり、言葉や表現の多様性を取り入れることができよう。これに対して、組織的労働者を排除し、犯罪者などのアウトロー的個人主義の立場から新しい表現を考案することは表現の多様性という点では限界が伴うであろう。なぜなら前者においては利用する表現の範囲が、広範な大衆を前提とし、アウトローも犯罪もより大きな範囲で包含できるのに対して、後者では労働者の組織を排除する原理が働くからである。しかし 1918 年から 1920 年というベルリン・ダダの最盛期においては、二人の芸術家の間の相違点は全く表面化していなかったのであり、ともに芸術革新のために生産的な活動をしたことは確認できよう。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

① 宇佐美幸彦（単著）「ヴァルター・メーリングの初期文学作品について―ジョージ・グロッスの絵画作品と関連して―」、関西大学『独逸文学』第 53 号、2009 年、p.1-28 （査読なし）

② 宇佐美幸彦（単著）「ハイネの物語詩の民衆性―ベンケルザングとの関連」、ハイネ逍遥の会『ハイネ逍遥』第 1 号、2008 年、p. 9-16 （査読なし）

６．研究組織
(1)研究代表者

宇佐美　幸彦(USAMI YUKIHIKO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：　00067737